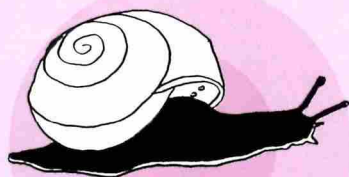


10. 昆虫以外のむし



大きさ

クモ（体長）頭胸部の先から腹部の先までの長さ

カタツムリ（殻高）殻の高さ

（殻径）殻の直径

昆虫以外のむし

1. クモのなかま

昆虫以外で、“むし”といわれる身近な生き物では、その種類や数の多さ、出会う機会の多いのが“クモ”でしょう。

日本で知られているクモはおよそ400種といわれていますが、昆虫ほど身近に親しまれるものにはなっていません。しかし、台所でアシダカグモがゴキブリを捕らえたり、ハエトリグモが窓ガラスに止まったハエを捕らえる姿を見たり、森や林を歩いていて顔にクモの網がかかったりなど、クモとの出会いは少なくありません。

〔クモと昆虫の見分け方〕

クモと昆虫の違いは右の表のように、3つの点から区別することができます。

	クモ	昆虫
からだ	頭胸部、腹部	頭部、胸部、腹部
あし脚	4対（8本）	3対（6本）
はね翅	なし	2対（4枚）

昆虫の体は、頭、胸、腹の3つの部分にわかれています。クモは頭と胸がくっついて、頭胸部となり、それと腹部の2つに分かれています。また、脚の数がクモは8本、昆虫は6本です。また、昆虫には4枚の翅がありますが、クモにはありません。

クモと言えば網を張って餌を捕らえるので有名ですが、アシダカグモやハエトリグモのように網を張らないものもたくさんいます。網を張る種類と張らない種類は、半分半分だと言われています。

また網を張るといっても、その網の形や大きさは種類によっていろいろ違ってきます。この網の形や大きさを調べるのも面白く、いい研究になります。

<網の形の例>



円網（イエオニグモ）

クモは網を張らなくても、生活する上で必ず糸を使うといわれます。例えば、ハエトリグモは網を張りませんが、垂直な板壁で獲物のハエをとらえる様子を見ていると、瞬間ですが糸を命網のように使っています。また、コマチグモのなかまはススキの葉を折り曲げて、卵室を作るのに糸を使います。



トンネル網（クサグモ）



管状網（ジグモ）



コマチグモの卵室

クモは生き血を吸うといいますが、そうではなく、小動物に飛びかかってみつくと、上あごの管から毒液を出して獲物を殺します。この毒液は、獲物を殺すだけでなく、同時に、その体のたんぱく質を溶かします。その溶けた液状にしたものを吸って、栄養にしているというわけです。

またクモは、獲物を毒液を出して殺すだけでなく、ドクグモなど怖い名前前のクモがいて気味悪く思われたり、恐れられたりします。しかし、クモの毒は弱く、人には殆んど害をあたえません。むしろ農業の上で有害な昆虫の天敵として大切な働きをしています。

身近なクモのいくつかを紹介しましょう。



コガネグモ

(コガネグモ科)

体長メス20~23mm

オス 5mm

ナガコガネグモ

(コガネグモ科)

体長メス20~25mm

オス10mm



ジョロウグモ

(コガネグモ科)

体長メス17~25mm

オス 6~8mm



ハエトリグモのなかま

体長5mm～7mmと小形でオスの方がやや小さめですが、コガネグモのなかまほど雌雄の差はありません。網は張りません。

眼がよく発達し、歩きまわりながらジャンプをして小さな虫を捕らえます。人家の窓ガラスや板壁などや車の中で見かけることも少なくありませんが、庭や畑の草の中などにはいろいろな種類のハエトリグモが見られます。

オスがメスの前でダンスをして見せるしぐさは有名です。



カニグモのなかま

体形が横に広く脚がカニのように横に出ていて、前後、左右に歩きます。網を張りません。



ガザミグモ

(カニグモ科)

体長メス5～10mm

オス5mm

キハダカニグモ

(カニグモ科)

体長メス7mm

オス5mm





コモリグモのなかま

孵化した子どもを腹部の背に乗せて保護するのでコモリグモといいますが、歩きまわって獲物えものを捕らえますが、時には巣を作ることもあります。

ササグモ (ササグモ科)

体長メス10~11mm オス9mm

草原にすみ、じょうずにジャンプして虫を捕らえます。杉を食害するスギタマバエてんてきの天敵です。



アシダカグモ

(アシダカグモ科)

体長メス25~30mm オス15~20mm

網を張らないクモでは日本最大です。家の中にすみ夜行性で、ゴキブリなどを捕らえて食べます。



2. ダンゴムシなど

庭のすみや畑など、ごみの中や石を裏がえした時、10mmばかりのだ円形をした灰色っぽい“むし”をよく見かけます。

体は何枚かの平らな甲らを並べたようで、手で触れるとすぐに丸くなるので「マルムシ」などと呼ばれています。



＜公園のかたすみで＞

よく見ると、いくらさわっても丸くならないのがあることに気づきません。

さわると丸くなるのがダンゴムシ、丸くならないのがワラジムシです。

ダンゴムシ（ダンゴムシ科）

体長14mmくらいまでになります。

朽ち木や枯れ草、石の下などでよく見かけます。海辺にいるハマダンゴムシに対して「オカダンゴムシ」ともいいます。



ワラジムシ（ワラジムシ科）

体長11mmくらいの大きさになります。枯れ葉やゴミの中、床下などで見かけます。さわってもダンゴムシのように丸くならず、速く歩き、体がダンゴムシよりやわらかい感じですよ。



3. ムカデ、ゲジ、ヤスデ

このなかまは足の数が多いのが特徴で、“^{たそくろい}多足類”といわれます。体にはたくさんの^{ふし}節があり、その節ごとに足がついています。

この足が、ムカデのなかまは節ごとに1対、ヤスデのなかまは2対ずつ出ている、ヤスデのようなのを“^{ばいきやくろい}倍脚類”といいます。



トビズムカデ

(オオムカデ科)

体長110~130mm、日本最大のムカデです。

昼間は古木などにひそんでいて、夜に出て昆虫などを食べます。人家に現れることもあり、かまれると毒性があり手当てが必要です。

ゲジ (ゲジ科)

体長24mmくらい、長い足は15対、30本あります。^{しよくかく}触角が長く、体長ほどもあります。家の床下や古木の空どうなどにひそみ、^{ゆかした}夕方から夜によく活動します。





アカヤスデ

(ヤケヤスデ科)

体長23mm。ごみや古木、^{がれき}瓦礫の下にいます。さわると、うずまき状に^{しゅうき}丸くなり、臭気を放ちます。

ババヤスデ (ヤスデ科)

体長40~50mm、森や林、竹林などの^{ふよう}落葉、腐葉、腐ち木の下にすみ、腐葉などを食べています。



4. かたつむり、なめくじ

昆虫やくモ、ダンゴムシ、ムカデなどは、^{せつそくどうぶつ}“節足動物”^{ふしじょう}といって体が節状になり、足などが折れ曲がるしくみになっています。しかし、カタツムリやナメクジには骨や節がなく、全体にやわらかく^{なんたいどうぶつ}“軟体動物”といい、動きがゆるやかです。この軟体動物の仲間には、イカ、タコ、貝類などで知られていて、多くは海にすんでいます。

カタツムリは、“デンデンムシ”とも言って親しまれていますが、そのなかまは日本で800種類もいます。



ナミマイマイ

(オナジマイマイ科)

殻高15~16mm。殻径32~40mm。
豊中市内の社寺林内や緑地に見られます。

クチベニマイマイ

(オナジマイマイ科)

殻高15~16mm。殻径26~37mm。
せいじやく
成熟した殻の口部分が紅色になるので、この名がつけました。



オナジマイマイ

(オナジマイマイ科)

殻高11.5~13.5mm、殻径17.5~18mm。小形で平たい感じです。
庭や公園のツツジなど生け垣いの根元にいます。





ウスカワマイマイ

(オナジマイマイ科)

殻高21mm、殻径23mm。マイマイの中では殻が高く、成熟しても殻口があまりそり返りません。

デンデンムシは広く知られていますが、同じ貝のなかまで陸にすんでいて、あまり知られていないのが、次の“キセルガイ科”の貝類です。



コギセルのなかま

殻の長さが10~15mm



ナミギセルのなかま

殻の長さが20~30mm

どちらもいろいろな種類があります。神社や古い家、公園などの古木の幹、石垣、落ち葉の下などにすんでいて、雨のあとなど注意するとよく見られます。

<幼貝と成熟した貝の見分け方>

貝類は昆虫のように^{へんたい}変態せず、徐々に貝殻が大きくなります。種類によって大きさの違う貝を、それが幼貝か成熟した貝かを見分ける一般的な方法として、貝殻の殻口に着目します。貝殻の殻口部分が薄く弱々しいのが幼貝で、固くて外へそり返ったのが成熟貝です。



マイマイのなかま



キセルガイのなかま

どちらも左が幼貝で右が成熟した貝です。

ナメクジのなかま

ナメクジはカタツムリと同じなかまですが、貝殻を持っていません。海にすんでいる動物で言えば、アメフラシやウミウシに近いなかまです。

ナメクジもカタツムリと同じで、草やコケなどの植物を食べいます。

腹足^{へんそく}といって、体の腹の面全体で、ほうようにして移動するのですが、乾燥したところは好みません。だから、雨天や雨の後のまだ地面がぬれているところで行動しているのをよく見かけます。



ナメクジ (ナメクジ科)

体長40~50mm

庭や畑、公園などに普通に見られます。また、家の台所などの湿った所にすみついていることもあります。

ヤマナメクジ (ナメクジ科)

体長150mm以上にもなります。社寺や大きい公園の森や林にすんでいます。緑地公園や千里丘陵の林や竹林で見かけることがあります。その数は少なく、珍しいものになっています。



雨が降らず、乾燥が長い間続くと、ナメクジやカタツムリはごみや落ち葉の下など湿った所にとじこもります。カタツムリは、殻口に乾燥を防ぐために、^{うす}薄い^{まく}膜を張って雨を待ちます。

カタツムリの中には、海のサザエや川にすむタニシのようにふたを持っていて殻口にふたをするヤマタニシのようなものもあります。

雨上がりのアジサイや生け垣^{い がき}などには、カタツムリの姿を見かけるのが普通でしたが、このごろは、あまり見かけなくなりました。これは、わたしたちが住む豊中市の環境が、これらの生き物たちにとって住みにくくなっていることを表わしているのでしょう。特に、地面をなめるように、コケなどの植物を食べながらはいまわっているカタツムリやナメクジは、空気や降る雨の汚れを体全体で感じるのでしょう。

